

源重郎世事手控

(二) 蛇だ蝎かつ

野見山悠紀彦

蛇蝎だかつと呼ばれる男がいる。その氏素性が賤しいわけではなく、至って真つ当な血筋に生まれていた。南伝馬町で五代続く紙問屋の主人、和泉屋傳次郎その人のことである。兄の急死を経て当主となり、既に三十年の歳月が流れた。その間、店が危機に瀕したと云う噂は聞こえてこなかった。それどころか間口十五間の大店に成長していた。

世間では蛇蝎と陰口を叩かれながら、何ゆえ店は繁盛しているのか？ 源重郎が定町廻りを勤めていた頃も不思議に思えてならなかった。蛇や蝎さそりと呼ばれる男は、一体どんな人物かと興味本位に店を覗いたことがある。ひと廻りほど歳上と思われた傳次郎は極めて愛想よく、とても悪態を吐かれるような男には見えなかった。

商人の上面の良さかと、その顔の下の本性を見極めようと努めたが、そんな気配は微塵も窺えなかった。首を捻り

ながら暖簾を潜る源重郎の袂には、そつなく一分銀が滑り込ませてあった。

そんな昔のことを思い出すことになったのは、当の傳次郎が奇妙な引き札をばら撒いていると噂が立ったことによる。実際にその引き札を目にしたのは、かつての同心部屋に顔を出したときであった。

定町廻りの同心が額を集めて見入っていた。

「このような引き札は見たこともござらん。一体どういふつもりでござろう？」

「特段、お上の意向に触れるものでもなし、成り行きを見守る外はあるまい」

その場に顔を見せた源重郎に、彼らは席を空けて引き札を手渡した。

「山根様はどうご覧になりますか？」



「かれこれ十数年も前になるが、一度当人に会ったことがござる。これと云つて変わったところはなく、至つて愛想の良い人物でござつた。およそ世間の噂とは違つており申した」

「火の氣のないところに煙は立たぬと申します。蛇蝎と呼ばれるには、それなりの訳があるのでは？」

「いや、一向に存ぜぬが、然しこの引き札はいささか変わつておりますな。諸国上紙御用達は分かるが、女房を募るとは聞いたこともない。しかも巳年の女に限るとある。蛇蝎と呼ばれていることを承知で、巳年の女としたのであるうか？」

「その上、支度金百両を用意するとあります。今年の干支は巳、巳年と申しても十二歳から上は幾らでもございます。これは大勢押し寄せることになりませぬか？」

「いかにもそうだが、ここに番号が振つてある。一番から十番までは三月一日、以後毎日十番ずつ面談とある。大きな混乱は生じまい。いつそ各々方の娘御も応募されては如何か？」

蛇蝎から親父殿と呼ばれるのかと、その場は爆笑に包まれて終わった。

それから十日も経つた二月の中頃、妻菊枝の実父の病が

思わしくないからと、本所の南割下水まで見舞いに出かけた。その途中、妻に頼まれた買い物もあつて南天満町を通りかかった。日本橋が先に見えていたが、その手前に人だかりができてゐる。二、三十人の男女が、ある店の前でざわついていた。近付いて店の金看板を見上げると和泉屋とあつた。どこかで聞いた名だと思つたが、すぐにあの紙問屋であつたと、傳次郎の嫁探しの一件を思い出してゐた。店の前の立札に例の引き札が貼られ、人々がその前で騒がしい。

「変わったまねをするじゃねえか！ いつてえ何を考えてやがる！」

「跡継ぎも居るつて云うじやないか。おおかた茶飲み友達が欲しくなつたんだろうよ」

「大体幾つになりやがる？」

「還暦も近いらしいよ」

「ふくん、蛇がお仲間を欲しがつてるわけか？ それなら七、八十の婆でも宛てがってやりや十分だ」

傳次郎は自分より一廻りは歳上だと思つてゐたが、意外に歳の開きはなない。

口さがない連中が笑い声を上げていた正にその時、當の傳次郎が突如暖簾を分けて顔を出した。強張つた表情の町衆を前に、傳次郎はにこやかに笑うと深く腰を折つて挨拶

をした。

「いつも和泉屋をご贖員にして頂き、真に有難く厚く御礼を申し上げます。この度は少々世間をお騒がせ致しておりますが、仰有る通り共に余生を過ごす茶飲み友達を求めております。良き方がございましたら、どうぞご推奨をお願い申し上げます」

再び深々と腰を折りその柔和な顔を上げたとき、たまたま源重郎と目が合った。そのまま暖簾の内に戻ろうとしたが動きを止め、何を思ったか源重郎に近付いてきた。

「失礼でございますが、北町の……」

「いかにも、山根源重郎でございます。ひと昔前、一度ご挨拶を申し上げたことがござる」

「やはりそうでございますか。まだ呆けてはおらぬよう。ところで少々ご相談に乗って頂きたいことがございます。ご都合をつけて頂ければ有難いのでございますが？」

「所用があつて本所へ参る途中でござるが、ふた刻もあれば戻つて参る。その後であれば……」

「それならば、柳橋の舟宗と申す舟宿にお越し願えますまいか。馴染みにしている舟宿でございます。七つ半には出向いております」

本所と柳橋は大川を挟んで向かい合っている。見舞いが

終わつても十分すぎる時があつた。どうやら義父の命脈も早晩尽きるように思われたが、和泉屋傳次郎の頼みと云うのが気にかかる。いま思いを巡らしても詮方ないと、両国の小屋掛けを覗いて時を費やした。無論定廻りのときの顔が物を云う。橋番には古くからの者がおり、旦那お久しぶりでございますと挨拶を送つてきた。定廻りとして、肩で風を切つて歩いた頃を思い出していた。浅草寺の七つの鐘を耳にして、ゆつくり柳橋へ向かつた。

「春だと申しますのに一向に暖かくなりませぬ。それでもご覧の春の山菜が用意されております。程なく花の便りも聞こえて参りましょう」

先に到着していた和泉屋傳次郎は席を整え火桶の炭を盛んにし、小部屋を温めて待ち構えていた。

「真に今年は春が遅うござるな。されど露の臺を目にするとなれば、春は近いと云うことござらう。それに手前の庭にも、直に花が咲くのではござらぬか？」

「手前共の庭に花の咲く木はござい……、これはお人が悪い！ 連れ合いは二十年も昔に亡くなり、息子の傳蔵もそろそろ独り立ちかと考えております。山根様もご冗談がお好きで……」

「いや、冗談ではない。もつぱらの評判でいひぬ」

「おおかた、蛇蝎が巳年の女を娶るのはふざけているとでも申しておるのでございましょう？」

「まあ、有体に申せばそう云うことなのだが、拙者にもその訳が分からぬ。何ゆえ巳年の女でなければならぬ？」

「それには至つて単純な訳がございまして、父親から女房にするには巳年生まれの女に限ると云われ続けて参りました。家訓みたいなものでございます。母親も巳年の生まれでございました。兄はそのためか、亡くなるまで嫁を迎えることがございませんでした。亡くなりました手前の女房も巳年生まれでございます。今年は巳年、これを機会にのちがえ後添を迎える決心を致した次第でございまして」

「ただそれだけのことでございませんか？」
「さようでございます」

噂とは違い、余りにも単純なその訳に拍子抜けした思いがした。実のところ、もつと複雑な裏事情があるのでないかと、野次馬にも似た気分で期待していた。おひとつどうぞと差し出された酒を受けながら、それにしても和泉屋は何の相談があつて自分を呼び止めたのか、今ひとつよく分からない。

帰りが遅いのを菊枝が心配していないかと、一抹の不安が頭を過つたとき、

「勝手ながら御新造様へは手代がお知らせに参上致して

おります。どうぞお寛ぎを」

と、源重郎の心の内を見透かしたように、傳次郎はにこやかに笑つて見せた。

なるほど、大店の主人ともなると、その気配りは行き届いたものだと感心したが、人の心の動きを見逃さぬ鋭さに驚かされた。気圧おそされるままに、自分から何の相談かと切り出していた。

「されば山根様もご存じの嫁取りのことでございます。

巳年の女と申しましても本当の歳も分からねば氏索性も様々で、真偽の程は分かり兼ねます。おおかたの見極めはつきましても、その索性まではなかなか難しゅうございます。殊更に悪く申すつもりはございませんが、女は様々な事情を抱えている者が多く、中には百両の支度金目当てに近寄つてくる者も出て参りましょう。

大勢の中よりこれは、と思う女を選びまして、その後、山根様のお手でその素性をお調べ頂きたいのでございます。

出入りの目明しに頼もうかとも思いましたが、今ひとつ信用できぬところがございまして、ずっと迷つておりました。山根様のお姿をお見受け致し、急なご相談となつた次第でございまして。急ぐつもりはございません。夏前までには決めます。来る秋には祝言をと考えております……。いかがでございますでしょうか？」

身元調べと聞かされて、源重郎は金貸しに翻弄されたうえ巽に嵌められた一件を思い起こした。毒薬を無理やり喉元へ押し込まれた気がしていた。素性のはっきりした相手のことだから、以前のようなことはないと思うのだが、今一つ気乗りがしない。

然し、源重郎には差し迫った事情があった。先ほど本所に見舞った義父の連れ合いから、金の無心をされていた。病人とは面会でできず、病床に連れ添う義母から十両の薬代が払えないと告げられていた。

これでは亡くなった菊枝の妹のため、その薬代を金貸しに借りに行った事情と全く同じではないかと、わが身の不運を呪わざるを得ない。考え込む源重郎の心の内を読み取ったかのごとく、

「失礼ながら当座の入用として二十両をご用意させて頂きました。不足が生じましたなら、幾らでもお申し付け下さいませ。お話が纏まりました暁には、改めてお礼をさせて頂きます」

ずばり核心を突かれていた。駕籠に揺られながら、懐の金の冷たさを感じていた。

翌日には、妻の菊枝に金を持たせ実家に向かわせていた。菊枝は驚いた様子を見せたが、金の出所は訊ねなかった。

妹の時のこともあり、いつもご心配をお掛けして相済みませぬと静かに頭を下げた。

それにしても和泉屋傳次郎とはどのような人物なのか？ 一見何の変哲もない商人とも思えるのだが、何処かに油断のないところが見受けられ、蛇蝎と呼ばれていることと相まって一抹の不安を源重郎に与えていた。金を受け取ったからには逃げるわけに行かない。今暫くは成り行きを見守り、傳次郎の出方を窺うことにした。

三月の声を間近に聞くや世間は急に春めいて、十軒店^{じっげんざな}、人形町、尾張町などの雛市も盛んに、町々には桃の花、山吹の担ぎ売りの声が響き渡る。交代で国許へ帰る武士が慌ただしく街中を行き交い、参勤武士の入府と相まって世間は急に騒がしさを増していた。

和泉屋傳次郎の嫁探しもそろそろ始まる頃だと、役所の庭に落ちる柔らかな陽射しを心地よく感じていたのだが、一方では間もなく始まるであろう身元調べが物憂く、いつそ金を返そうかと思ってはみたものの、既に十両の金は義父の薬代に消えて、他からの手当の仕様もなかった。

気の重い日々を過ごしていた源重郎が呼び出しを受けたのは、それから五日後のことである。場所は柳橋の舟宗を使うと当初から決めてあった。

「めつきり春めて参りました。この時節、参勤交代は云うに及ばず、奉公人の出替りやお女中の宿下がり、さらには花見と街中も俄かに騒がしくなつて参ります。このよ
うな時節にお手を煩わせるのは心苦しい限りではございま
すが、強つてお願いを申し上げます」

再び丁重に頭を下げられて、僅かに残つていた断る勇氣
もたちまち雲散霧消してしまつた。

面談の成り行きはどうかと訊ねた源重郎に、傳次郎は身
を乗り出して答えた。

「それが、でございます。思いに反して年若い女ばかり
が参りました。手前の歳を考えますれば、四十八か精々三
十六と云つたところでございましょう。ところが初日には、
二十四の女が十人中に七人もおりました。還暦の女が一人
に四十八が一人、まさかの十二の小娘も一人おりまして、
思いとは随分違つておりました。その後も似たようなもの
でございます。おおかた、妾めかけを探しているとも思われた
ようで、困惑致しております」

「子息もおられるし、いっそ妾の方がよろしいのでは
ござらぬか？ 継母とはうまく行かぬのが世間の相場でご
さる。聞けば子息の嫁取りもまだの様子、そちらが先
ではござらんか？」

「それも十分承知致しております。手は打っております
ゆえ、間もなく決まりましょう。親子揃つての婚礼もよろ
しいではございませんか？」

どうでもよい、好きなようにしたらよかろうと思わず口
に出しかけた。

「さようか。それほど若い娘が多いのであれば、それも
構わぬではないか。世間にその例は幾らでもござる」

「それが近頃の娘は真に現銀たぬしなものでございまして、こ
のような年寄りに抱かれてもよろしいのかと訊ねますと、
大店のご内証に納まれるのであれば一向に構わぬと申しま
す。親はご承知かと訊きますと、至つて喜ばしきこととて、
進んで背中を押したそうでございます。

然しそれほど手前は色呆け致しておりません。それに息
子より若い嫁を貰えば、世間は何と申しましょう。蛇蝎に
色呆けが重なりましては、さすがに手前も立つ瀬がござい
ません」

源重郎は笑わざるを得なかつた。当の傳次郎も声を上げ
て笑つていた。

「それで目ぼしい者はござつたのか？」

「一人だけお調べ頂きたい女がございます。お雪と申す
二十四になる娘で、神田明神下の常盤とぎわと申す料理茶屋で台
所の下働きをしていると申します。手が荒れておりまして、

堅気の様子を窺えます」

「ちよつと待て！ 息子より若いのは困ると申したばかりではないか？」

「いえ、これは言葉が足りませんでした。これにかこつけて好ましい女がおりましたら、店の奉公人にとも考えております。あるいは息子の嫁にとも考えているのでございます」

「なるほど、一石三鳥を狙われるか……」

そう云つてはみたが、口入れ稼業の片棒まで担がせるのかと、釈然としない思いが残った。それにしても傳次郎は、なかなか遣り手の商人だと思わざるを得ない。意表を突く引き札で世間の耳目を集め、その上抜かりなく実利を踏まえている。このくらの才覚がなければ大店にはの上がれないのかと、改めて傳次郎と云う人物に興味を持った。小娘一人の素性を調べるのに手間はかからない。五日後までには調べて知らせると、次に会う日を決めてその日は終わった。

用意された駕籠で八丁堀に戻る源重郎の手元には、御新造様への手土産にと渡された菓子折りがあつた。

料理茶屋常盤で働くお雪の素性は難なく知れた。王子村の小百姓、富吉の四女で五年前から常盤で働いていると云

う。取り立ててこれと云う取柄もない娘だったが、骨身を惜しまずに働いていると朋輩たちから聞き込んだ。何ゆえ嫁取りに応じたのか疑問は残るが、どうやら朋輩たちの噂話を耳にしていることらしい。若い娘の心の内は察しようもなかつたが、何か決意を促すものがあつたのだらうと、それ以上の詮索はしなかつたのである。

舟宗の小座敷から大川を見下ろしている。気の早い酔客が早くも舟遊びに繰り出していた。三分咲きだ、五分咲きだと花の噂も姦しくなっている。川縁と云うこともあつてか、まだ手焙りが用意されていた。

「春と申しましても陽が落ちますと急に冷えて参ります。花冷えとはよくぞ申したものでございます。昔からこの時節には年寄りの死人が多く出ますゆえ、手前も風邪をひかぬように心掛けております」

「いや、見るからにそなたは丈夫そうではないか。わしなどより余程長生きしそうに見える。わしの家系で、還暦を越した者は僅かしかござらん」

「冗談を。それはさておき、お雪と云う娘の素性はいかがでございますか？」

「常盤に奉公して五年になると云うが、真面目に勤めておるそう。朋輩の評判も悪くない。何ゆえ応募したのか

その辺りは分からぬが、おおかた豊かな暮らしを夢見てのことであろう。親元は王子村の百姓、富吉の四女であると聞いた」

「聞いた？ それではご自身でお確かめになりませんかでしたので？ 不躰ながら、それでは困ります。不十分でございませぬ。口先、書付などは、どのようにでも誤魔化しが効きます。それを信用しては必ず痛い目に遭うのが落ちでございませぬ。商いにおきまして己が目でご確かめねば、たとえ騙されても悔いが残ります。今ひとつのご尽力をお願い申します」

いきなり顔を叩かれた思いがした。その氣迫に押され、たじたじとなっていた。尤もな云い分であったのだ。

数年前、金貸しの素性を調べなかつたことが思い出される。あの時、金貸しの素性を確かめておけば異に嵌められることもなかつたはずだ。それを欠いたため、易々と手玉に取られた。己の身の軽薄さを再び指摘されたのである。

「相済まぬ。真に手抜かりであつた。以後、手落ちなきように努め申す」

「口が過ぎました。お許し下され。世のことは全て人次第と心得ております。誠ある人間は少なきものでございませぬ。そのような者がおれば、たとえ千金を費やしても惜しくはございませぬ」

「明日にでも親の在所を訪ね、お雪の身元を確かめて参ろう。それで、今日の話はどのような？」

「はい、本日は二名のお調べをお願い申します。一名はおとしと申します。三十六になります女で、深川万年橋を東へ一丁、おとし茶屋と申す水茶屋の主人でございませぬ。夫を十年前に亡くし、堅気の水茶屋を営んで参つたと申しております」

今ひとりはお旗本の次女で、時枝様と申される二十四になられるお方でございませぬ。無役の百五十石であられるそうで、病人を抱え内証が苦しいと率直に申されました。お住まいは牛込御門内、滝沢勢左衛門様のご息女でございませぬ。以下の詳細はここに書き記しております」

「おとしはともかく、武家の息女でも構わぬと？ それに歳も若い？」

「はい、そのお方は息子の嫁にと考えております。苦勞をなされたお方なら、お武家様でも一向に差し支えございませぬ」

「委細承知致した。手落ちなきよう計らい申す」

冷や汗が出た会談であつた。傳次郎に諭されて、己の未熟さを思い知らされた。俺はそんなに軽薄な人間なのかと、金貸しに人が好過ぎると云われた言葉が蘇ってくる。春宵のざわめきがまだ収まらぬ街中を、駕籠は勢いよく走り抜

けて行く。手にはいつものように土産の菓子折りがあった。

王子村名主、木村忠左衛門の元を訪ね、百姓富吉の在所を尋ねた。だが驚いたことに、富吉と申す者はおらぬと告げられたのである。勿論、お雪と云う娘にも憶えはないと云われた。和泉屋の云った通りとなった。己の不甲斐なさに落ち込まざるを得ない。

帰りには飛鳥山での花見を考えていたが、急ぎ明神下の料理屋常盤へ向かった。もはや花など眼中になかった。ここで信頼を取り戻さねば沽券に関わると、一目散にお雪の元に向かったのである。

少々威丈高に女将を呼び出し、お雪を連れてこさせた。

「お前はお雪の身元を確かめて雇い入れたのか！ 申す在所に親など居らぬではないか！」

女将はけろりとしている。

「お雪、本当かい？ 口入れ屋の銀蔵さんに嘘を云ったのかい？」

お雪はただ項垂れているばかり。

「本当のことを云ってごらん。悪いようにはしないからさ。お前がはつきり答えなきや、旦那に連れて行かれるよ。いえ、よく働かし、悪い子じゃないんですよ」

実のところ若い娘の取り調べは苦手である。ついぶつき、棒に脅しつけることになってしまう。

「正直に答えないか！ 答えなければ自身番まで連れて行くぞ！」

お雪は泣き出した。

「おやまあ、泣くこたあないじゃないか。幾つだと思ってるんだい。二十四にもなって小娘みたいに泣くんじやないよ」

やっとお雪はぼそぼそと語り出した。在所は下野宇都宮の近くで、家は小作農だと云い、父親の名は富吉に間違いないと白状したのである。家を飛び出した経緯から在所を偽ったのだと云う。今すぐ宇都宮に向くわけに行かず、女将に預けることにして、その場は収めた。

小娘一人に全く厄介なことだと、正直なところ仕事を受けたことが悔やまれた。然し源重郎の苦勞は、この程度で済むはずもなかったのである。

「大川を往き来する舟もめつきり増えました。ほれ、あの通り舳先の明りが揺れております。吉原に足を踏み入れたことはございませんが、さぞ大層な賑わいでございます。花見にでも出かけたところでございますが、このこともあって真に忙しい思いを致しております」

「商人が忙しいのは、何よりも結構な話ではないか」

「それはその通りではございますが、貧乏暇なしとも申します。世間は全て、表と裏では別々の事情を抱えているものでございます」

「それはそうだが……、いやその通りであった。お雪の身元はあなたが申した通り偽りであった。宇都宮の小百姓の娘であった。家を飛び出したゆえ、口入れ屋に嘘を申したそうだ。宇都宮の事情までは分からぬゆえ、女将に預けておいた」

「さようでしたか、お手間を取らせ申しわけございません。それで、おとしと時枝様のお調べは？」

「おとしがどのように申したかは知らぬが、なかなかの食わせ者であった。表向きは堅気の商売と見せて、店の女たちには客を取らせていた。客の待つ出逢い茶屋に女たちを遣わし、それと悟られぬようにしておる。元は品川の女郎であった云う。これは確かな筋から耳にした。

時枝と申す息女については、その内情の詳しい所までは分からぬが、当主滝沢勢左衛門殿は労咳で、ここ二年ほど臥せっておられるのは間違いない。長女は同輩の他家へ嫁いでおられたが、今年の初めに亡くなっておられる。跡取りもなきゆえ、婿を迎えようとなされたようだが、どこからも話が来ぬそうだ。

他家の次男三男であれば喜んで婿入りしそうなものだが、どうもその容姿に問題があると聞いた。その娘子の様子はいかがであった？」

「さようでございますか。仰られる意味はよく分かります。見目麗しいとはお世辞にも申せません。悲運なことに顔に火焼ひやけがございました。お顔の半分近くが赤黒く焼けておられます。白粉で少しは隠せますが、世間では中々難しゅうございます。悲しき運命を背負っておられます」

「然し、素性を確かめよと申された以上、あなたにはその意があるのでは？」

「迷わなかったと申せば嘘になりますが、それなりの覚悟を決めたのでございます。商いに障りが生じないかと考えましたが、店に顔を出さずとも内証の始末に励んで頂ければそれでよいと、思いを改めてございます」

「なるほど、御奇特なことだ。滝沢家も娘を嫁に出し、改めて養子を迎えれば万事うまく収まる。時枝と申される息女もそこまで考えてのことのごぞろ。殊勝なことだが、聊か哀れでもござるな」

「同じ思いを抱きました、哀れみで嫁を貰うわけには参りませぬ。心構えのしっかりしたお方と思ひ、お調べをお願い申し上げます」

「いやよく分かった。それで次の調べは？」